

令和4年度病害虫発生予報 第3号（6月予報）

令和4年6月1日
青森県病害虫防除所

【概要】

水 稲：イネミズゾウムシは平年並、イネドロオイムシはやや多いと予想される。

小 麦：赤かび病は平年並、うどんこ病はやや少ない、赤さび病は少ないと予想される。

りんご：モニリア病は少ない、黒星病はやや少ない、斑点落葉病は平年並と予想される。

リンゴコカクモンハマキ、モモシンクイガは平年並、キンモンホソガはやや少ない、クワコナカイガラムシは津軽地域でやや多く、県南地域でやや少ないと予想される。

特産果樹：ぶどうの灰色かび病、おうとうの灰星病はやや少ないと予想される。

野 菜：じゃがいもの疫病は平年並と予想される。

アブラナ科野菜のコナガは津軽地域で多く、県南地域でやや少ない、ヨトウガは平年並と予想される。
にんにくの春腐病、さび病、ネギコガは平年並、斑点性病害はやや少ないと予想される。

1 予報内容

(1) 水 稲

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
イネミズゾウムシ	県内全域	早い (成虫侵入盛期)	平年並	①向こう1か月の気温は平年並か高いと見込まれることから、成虫侵入盛期が平年より早まると予想される。 ②前年の発生量は平年並であった(±)。
イネドロオイムシ	県内全域	早い (ふ化盛期)	やや多い	①向こう1か月の気温は平年並か高いと見込まれることから、ふ化盛期が平年より早まると予想される。 ②前年の発生量は平年よりやや多かった(+)

(2) 小 麦

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
赤かび病	県内全域	やや早い (開花期)	平年並	①開花期は平年よりやや早い。 ②向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
うどんこ病	県内全域	—	やや少ない	①5月中旬の発生量は平年より少ない(－)。 ②向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
赤さび病	県内全域	—	少ない	①5月中旬の発生は認められていない(－)。

(3) りんご

病害虫名	予報内容			予報の根拠
	発生地域	発生時期	発生量	
モニリア病 (実腐れ)	県内全域	—	少ない	①葉腐れ・花腐れの発生量は平年より少ない(—)。
黒星病	県内全域	—	やや少ない	①5月の発生量は平年より少ない(—)。 ②向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
斑点落葉病	県内全域	平年並	平年並	①向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並と予想される(±)。 ②前年の発生量は平年並であった(±)。
リンゴコカクモン ハマキ	県内全域	やや早い	平年並	①4～5月の気温は平年より高く推移し、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想される。 ②越冬幼虫量は平年並である(±)。
キンモンホソガ	県内全域	やや早い	やや少ない	①4～5月の気温は平年より高く推移し、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想される。 ②前年秋の発生量は平年よりやや少なかった(—)。
クワコナカイガラ ムシ	津軽地域	—	やや多い	①越冬卵量は津軽地域で平年よりやや多く(+)、県南地域で平年よりやや少なかった(—)。
	県南地域		やや少ない	
モモシンクイガ	県内全域	—	平年並	①前年の発生量は平年並であった(±)。

(4) 特産果樹

病害虫名	予報内容			予報の根拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(ぶどう) 灰色かび病	県内全域	やや早い	やや少ない	①ぶどうの展葉日は津軽地域で平年よりやや早く、県南地域で平年より早い。 ②向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並と予想される(±)。 ③前年の発生量は平年より少なかった(—)。
(おうとう) 灰星病 (実腐れ)	県内全域	早い	やや少ない	①おうとうの落花日は平年より早い。 ②向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想される(±)。 ③花腐れの発生量はやや少ない(—)。

(5) 野 菜

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(じゃがいも) 疫病	県内全域	平年並 (初発)	平年並	①開花期は平年並と見込まれる。 ②初発確認時期の平年値は6月26日頃である。 ③向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
(アブラナ科野菜) コナガ	津軽地域	やや早い (第1世代 成虫)	多い	①性フェロモントラップによる飛来世代の誘殺時期は平年よりやや早く、誘殺数は津軽地域で平年より多く(+)、県南地域で平年より少ない(-)。 ②5月中旬の寄生数は津軽地域で平年より多く(+)、県南地域で平年より少ない(-)。 ③向こう1か月の気温は平年並か高いと予想される(+)
	県南地域		やや少ない	
(アブラナ科野菜) ヨトウガ	県内全域	平年並 (幼虫発生)	平年並	①性フェロモントラップによる越冬世代の誘殺時期、誘殺数は平年並に推移している(±)。 ②5月中旬の卵塊・幼虫の寄生数は平年並に少ない(-)。 ③向こう1か月の気温は平年並か高いと予想される(+)
(にんにく) 春腐病	県内全域	—	平年並	①5月中旬の発生量は平年より少ない(-)。 ②向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並と予想される(+)
(にんにく) さび病	県内全域	—	平年並	①5月中旬の発生量は平年並である(±)。 ②向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
(にんにく) 斑点性病害 (葉枯病・黄斑病)	県内全域	—	やや少ない	①5月中旬の発生量は平年並に少ない(-)。 ②向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
(にんにく) ネギコガ	県内全域	やや早い (幼虫発生)	平年並	①性フェロモントラップによる越冬世代の誘殺数は平年並に推移している(±)。 ②5月中旬の発生量は平年並に少ない(-)。 ③向こう1か月の気温は平年並か高いと予想される(+)

※ 予報の根拠内の気象情報は、5月26日発表の1か月予報による。

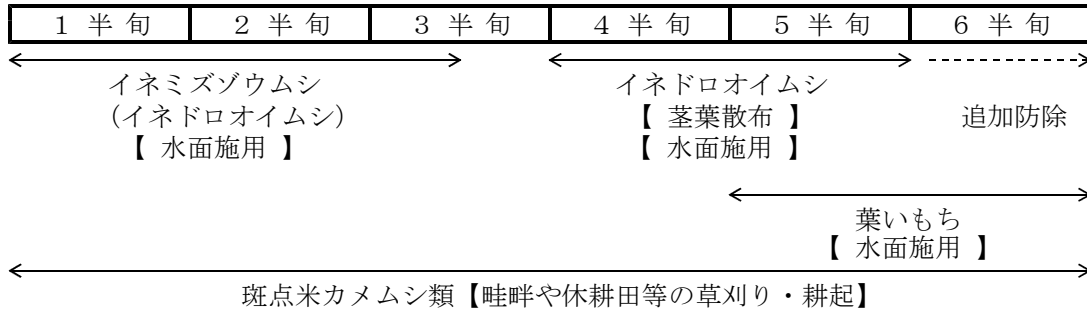
発生量に対し、(+): 多くなる要因、(-): 少くなる要因、(±): 多少に大きく影響しない要因

2 防除のポイント

薬剤名の後に記載している括弧内の数字・記号は、有効成分の作用機構分類RACコードを示す。なお、混合剤等、複数の有効成分を含む剤はコードをカンマで区切って併記した。FRAC農薬用殺菌剤作用機構分類及びIRAC農薬用殺虫剤作用機構分類の最新版は農薬工業会ホームページ (<http://www.jcpa.or.jp/lab0/mechanism.html>) を参照。

(1) 水 稲

《 6月の防除作業 》



注： ←→ は防除時期
 () 内は同時防除できる害虫
 【 】内は防除方法
 防除薬剤は県農作物病虫害防除指針等を参照するか、指導機関に問い合わせる。

【 葉いもち 】

- ① 補植用の取置苗は放置すると、葉いもちの発生源になるので、補植作業が終わり次第処分する。
- ② 葉いもちが例年発生する水田で、箱施用剤又は側条施用剤による防除を行っていない場合は、6月末までに水面施用剤を予防散布する。
- ③ 葉いもちの初発生は、6月末から7月中旬に確認されるので、初発状況に十分注意し、病斑が見つかり次第初期防除を徹底する。

【薬剤耐性いもち病菌への対策】

QoI 剤耐性菌が東北地域でも確認されている。本県における薬剤耐性菌の発生を未然に防ぐため、以下の対策を地域一体となって実施すること。

- ア 耐性菌の発生リスクを回避するため、同一系統剤の連続での使用を避ける。
- イ 以下の薬剤は育苗期から本田期を通じて年1回以内の使用に止める。
 - ・QoI 剤オリブライト剤 (F:11)、アミスター剤 (F:11) は同一系統剤とみなす。
 - ・その他：キタジンP剤 (F:6)、フジワン剤 (F:6) は同一系統剤とみなす。
- ① 上記の剤は、1年ごとに作用機構の異なる薬剤とローテーションで使用する。
- ② これらの成分を含む本田散布剤は、多発時の使用を避ける。
- ウ 種子流通に伴い耐性菌が広範囲に伝播することがあるため、採種ほ及びその周辺ではこれらの成分を含む薬剤は使用しない。
- エ 自家採種は耐性菌発達の原因となるので、種子更新、塩水選及び種子消毒を行う。購入種子（飼料用稻を含む）でも必ず種子消毒を行う。
- オ 適正な肥培管理を厳守するとともに、早期発見と早期防除に努める。薬剤は使用方法に記載された使用量及び希釈倍数を厳守する。
- カ QoI 剤を使用した水田において、いもち病（葉いもち、穂いもち）が多発生した場合には、罹病葉（穂）を採取し、病虫害防除所又は関係指導機関に連絡するとともに、他系統薬剤で追加防除を行う。

【 イネミズゾウムシ 】

- ① 箱施用剤等を使用しなかった水田では、食害株率又は食害度が下記の基準を超えた場合に、水面施用剤による本田防除を行う。

《防除判断の目安》

調査時期	食害株率	食害度
6月第1～2半旬	82%	25

注) 畦畔から中央に向かって2mぐらい入った地点から1筆当たり2か所について計50株以上を調査する。

[食害程度別基準]

- 甚 (A) : ほぼ全葉に激しい食害痕が認められる。
- 多 (B) : ほぼ全葉に中程度の食害痕が認められる。
- 中 (C) : 1/2～ほぼ全葉に軽い食害痕が認められる。
- 少 (D) : 1/2～以下の葉に軽い食害痕が認められる。
- 無 (E) : 食害痕が認められない。

$$\text{食害度} = \frac{A (\text{Aの株数}) \times 4 + B \times 3 + C \times 2 + D}{\text{調査株数} \times 4} \times 100$$

【イネドロオウムシ】

- ① 箱施用剤等を使用した水田や5月下旬～6月上旬にイネミズゾウムシを対象とした水面施用剤を処理した水田では、本虫の防除は不要である。ただし、発生が遅れ、6月下旬に食害が多くなるような場合は、追加防除が必要になる。
- ② 箱施用剤等による防除やイネミズゾウムシ防除を実施しなかった水田では、ふ化盛期 (=本田被害発生初期 : 6月第4～5半旬) に防除する。
- ③ 低温や曇天の日が続くと産卵期間が長引き、防除適期を逸しやすい。また、幼虫の食害活動にも好適となるため、被害が大きくなることもある。畦畔際の発生状況を観察して防除適期を逃さないようにする。

【イネヒメハモグリバエ】

- ① 成虫は水面に垂れている葉や浮き葉に産卵する。産卵に適した葉が多いと被害を助長する傾向があるため注意する。
- ② 水田内をよく観察し、被害が見られたら茎葉散布剤を散布する。薬剤は畦畔にも散布する。ただし、本虫に登録のある箱施用剤を使用した場合には、追加防除は不要である。

【斑点米カメムシ類】

- ① 発生地となっている水田周辺の休耕田や畦畔等でイネ科雑草が開花・結実しないように刈取りや耕起を行う。
- ② ノビエ・ホタルイ・シズイ等を多発させないように雑草防除を徹底する。

★農薬散布後の「止水期間は7日間」です★

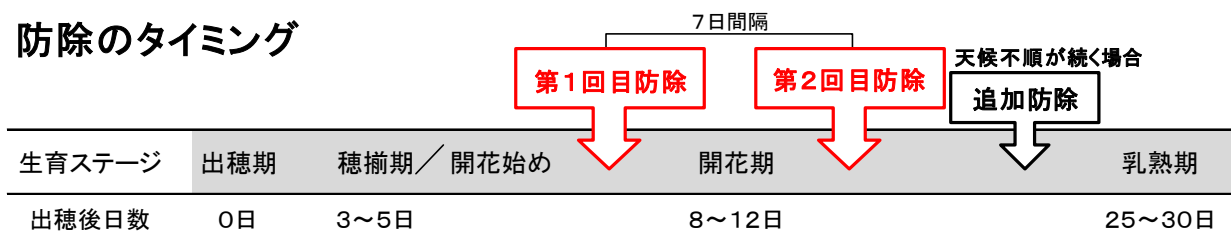
水田で除草剤や水面施用剤などの農薬を使用した時には、河川に流れ出ないように散布後7日間は落水・かけ流しをしない。その間の入水は水尻を止めたままで行う。

(2) 小麦

【赤かび病】

赤かび病の病原菌は、人畜に中毒症状を起こす恐れがある「かび毒(デオキシニバレノールやニバレノール等)」を産生するため、農産物検査規格が改正され、平成15年産から食用麦の赤かび粒の混入限度が0.0% (重量パーセントで0.04%以下) と非常に厳しくなっている。また、厚生労働省においてデオキシニバレノールの暫定的な残留基準値「1.1ppm」が設定されている。このため、かび毒の発生防止には“予防防除の徹底”を図ることが重要である。

防除のタイミング



※出穂期: ほ場全体の40～50%が出穂した日 ※開花期: 1穂につき数花開花しているものが、ほ場全体の40～50%に達した日

- ① 赤かび病菌は、開花始めから10日程度の間感染しやすいことから、「開花始め～開花期」に第1回目の防除を、その7日後に第2回目の防除を行う。
- ② 第2回目の防除の後、天候不順が続く、蔓延のおそれがある場合は、追加防除を実施する。
- ③ 赤かび病の病原菌は数種類あり、紅色雪腐病の病原菌と同一のものがあるため、消雪後に紅色雪腐病が見られたほ場では防除を徹底する。
- ④ チオファネートメチル剤（F:1）は耐性菌が出やすいので連用しない。また、紅色雪腐病の発生したほ場ではチオファネートメチル剤は使用しない。
- ⑤ アミスター20フロアブル（F:11）は、かび毒の産生量を増加させた事例があるので、本剤は出穂後に使用しない。

【 うどんこ病、赤さび病 】

- ① 赤かび病にも登録のある薬剤を選択し、効率的な防除を図る。
- ② チオファネートメチル剤は耐性菌が出やすいので連用しない。

(3) りんご

【 モニリア病 】

- ① 実腐れや株腐れはそのまま放置すると地表に自然に落下して越冬し、翌年の伝染源になるので、園内を見回り、見つけ次第摘み取って、土中深く（10cm以上）に埋めるなど必ず適切に処分する。

【 腐らん病 】

- ① 枝腐らんは見つけ次第、切り取って処分する。
- ② 胴腐らんは見つけ次第、泥巻きを行うか、削り取って塗布剤（フランカックスプレー、バッチレート、トップジンMオイルペースト）を塗る。トップジンMオイルペーストを使用して再発した場合は、泥巻きを行うか、削り取って他の塗布剤を塗る。
- ③ 摘果後の果柄感染による枝腐らんの発生が多い園地では、「6月中旬」にラビライト水和剤を選択する。

【 黒星病 】

- ① 園地の発生状況を丁寧に確認し、発病葉や発病果は見つけ次第摘み取り、土中に埋めるなど適正に処分する。
- ② 散布むらを生じないように適切な量を丁寧に散布する。散布予定日に降雨が予想される場合は事前散布に徹する。また、曇雨天が続く場合には晴れ間を見計らって散布するなど、散布間隔は10日以上開かないように注意する。
- ③ 事前散布の徹底により、散布回数が増えている場合は、各農薬の成分総使用回数以内で使用するよう十分注意する。

【 輪紋病 】

- ① いぼ皮病斑は軽く削り取ってトップジンMペーストを塗る。
- ② いぼ皮病斑が多発している園地では、6月中旬から7月末までの基準薬剤の中から有機銅剤（キノンドー顆粒水和剤、オキシンドー水和剤80）、オキシラン水和剤、ダイパワー水和剤、ベフラン液剤25のいずれかを選択すると、枝における新たな感染を抑制できる。

【 斑点落葉病 】

- ① 6月下旬から不要な徒長枝を剪去する。
- ② 高温・多湿で急増するので注意する。

【 リンゴコカクモンハマキ 】

- ① 発生の多い所では、フェロモントラップを利用して発生消長を調査し、成虫最盛期から推定した幼虫ふ化最盛期に薬剤散布を行う。

【 クワコナカイガラムシ 】

- ① 6月下旬から7月中旬に、越冬世代成虫が大枝の切口や木の空洞部周辺に集まるのでブラシなどでつぶす。
- ② バンド巻きによる誘殺などで密度の低下を図る。バンドは越冬世代成虫の産卵前（6月下旬）に巻き付け、第1世代卵のふ化前（7月20日頃）に必ず除去する。

【 シンクイムシ類 】

- ① モモシンクイガ対策として「6月中旬」から毎回防除剤を使用する。また、もも、なし、すもも、マルメロなども発生源となるので、適切な管理を行う。
- ② ナシヒメシンクイの発生が多い園地では、「ふじの落花20日後頃」にも防除剤を使用し、その後9月中旬まで、毎回防除剤を散布する。また、うめ、あんず、もも、なし、すもも、おうとうなども発生源となるので、適切な管理を行い、芯折れは見つけ次第剪去して処分する。
- ③ 前年に被害がなく、周辺に放任園など発生源の見られない園地で、ピレスロイド剤（バイスロイドEW、サイハロン水和剤、アーデントフロアブル、イカズチWDG）を使用した場合は、次の防除剤を省略できる。
- ④ 被害果は見つけ次第採取し、7日間以上水に漬けるか、穴を掘り10cm以上の土をかぶせて埋める。

【 ハダニ類 】

- ① 薬剤の選択に当たっては、発生しているハダニの種類を確認する。
- ② ひこばえ（根ばや）と大枝から発出している徒長枝は早めに剪去する。
- ③ ハダニ類の防除剤（殺ダニ剤）は薬剤抵抗性が出やすいので、同一薬剤は年1回の使用とする。

参考表 りんごに使用する農薬の作用機構分類

<殺菌剤>

薬剤名	有効成分	FRAC コード	系統名
フランカッツスプレー	ポリオキシシンD亜鉛塩	19	抗生物質
バッチレート	有機銅	M01	有機銅剤
トップジンMオイルペースト	チオファネートメチル	1	ベンゾイミダゾール
トップジンMペースト	チオファネートメチル	1	ベンゾイミダゾール
デランフロアブル	ジチアノン	M09	キノン
ラビライト水和剤	チオファネートメチル	1	ベンゾイミダゾール
	マンネブ	M03	ジチオカーバメート
キノンドー顆粒水和剤	有機銅	M01	有機銅剤
オキシンドー水和剤80	有機銅	M01	有機銅剤
オキシラン水和剤	キャプタン	M04	フタルイミド
	有機銅	M01	有機銅剤
ダイパワー水和剤	キャプタン	M04	フタルイミド
	イミノクタジンアルベシル酸塩	M07	ビスグアニジン
ベフラン液剤25	イミノクタジン酢酸塩	M07	ビスグアニジン

<殺虫剤>

薬剤名	有効成分	IRAC コード	系統名
バイスロイドEW	シフルトリン	3A	ピレスロイド
サイハロン水和剤	シハロトリン	3A	ピレスロイド
アーデントフロアブル	アクリナトリン	3A	ピレスロイド
イカズチWDG	シベルメトリン	3A	ピレスロイド

FRAC農業用殺菌剤作用機構分類、IRAC農業用殺虫剤作用機構分類の最新版は農薬工業会ホームページ (<https://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>) を参照。

(4) 特産果樹

○ ぶどう

【 灰色かび病 】

- ① 新梢の摘心や誘引を適切に行い、園地内の通風を良くする。ハウス栽培では室内の換気に努め、過湿にならないようにする。
- ② 発病葉、発病花穂、発病果及び発病枝はできるだけ早く取り除き土中に深く埋める。
- ③ 「キャンベル・アーリー」では「開花10日前頃（6月上旬）」の散布後、低温が続いて次の「開花直前」までの散布間隔が開きすぎると多発が懸念されるので、「開花見込みの1週間前頃」にピクシオDF2,000倍を特別散布する。発生の多い園地では、「開花直前」にゲッター水和剤又はフルーツセイバーを選択する。
- ④ 「スチューベン」で発生の多い園地では、「開花直前」にゲッター水和剤を選択する。

【ベと病】

- ① 排水不良園では、排水溝を掘って、雨水が長く溜まらないようにする。
- ② 発生が多い園地では、「開花10日前頃（6月上旬）」にアリエッティC水和剤又はキノンドー水和剤40、「開花直前」にアリエッティC水和剤を選択し、「落花直後」にランマンフロアブル2,000倍又はライメイフロアブル4,000倍も使用する。

【晩腐病】

- ① 発生が多い園地では、「落花直後」にスイッチ顆粒水和剤又はポリベリン水和剤を選択する。

【褐斑病】

- ① 発生が多い園地では、「開花10日前頃（6月上旬）」にオーソサイド水和剤80、「開花直前」にオーソサイド水和剤80又はフルーツセイバー、「落花直後」にポリベリン水和剤を選択する。ただし、「開花10日前頃（6月上旬）」及び「開花直前」に灰色かび病防除のためにアリエッティC水和剤を散布すると、この時期の褐斑病対策の防除は必要ない。

○ おうとう

【灰星病】

- ① 実腐れは、見つけ次第摘み取って処分する。
- ② 「満開35日後頃」以降、多発が懸念される場合は「佐藤錦の収穫見込みの7日前頃」にパスワード顆粒水和剤1,500倍、インダーフロアブル5,000倍又はルビゲン水和剤3,000倍のいずれかを特別散布する。「満開35日後頃」に、「紅さやか」などの早生種に散布する場合、収穫前日数に注意して薬剤を選択する。

【オウトウショウジョウバエ】

- ① 被害果は速やかに処分し、密度の低下を図る。樹上の取り残し果実も、重要な発生源になるので、できるだけ摘み取って処分する。

【カメムシ類】

- ① 8月上旬まで断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので卵塊は見つけ次第、つぶして処分する。ふ化幼虫がみられたら、分散する前に捕殺する。
- ② 「満開35日後頃」に発生がみられた場合、テルスターフロアブルを選択する。
- ③ 「収穫前（佐藤錦）」に発生がみられた場合、オウトウショウジョウバエ対策でスカウトフロアブルを使用すると、この時期のカメムシ類対策の防除剤は必要ない。
- ④ 「収穫前（晩生種）」に発生がみられた場合、テルスターフロアブルを選択する。ただし、この時期にオウトウショウジョウバエ対策でスカウトフロアブルを使用すると、この時期のカメムシ類対策の防除剤は必要ない。

○ もも

【せん孔細菌病】

- ① 春型枝病斑及び夏型枝病斑は重要な伝染源になるので、速やかに切除する。
- ② 前年果実被害が多かった園地では、果実への感染を防ぐため有袋栽培とする。仕上げ摘果をできるだけ早く終わらせ、速やかに袋かけを行う。
- ③ 「落花20日後頃」～「落花40日後頃」にマイコシールド又はスターナ水和剤を1～3回散布する。また、生育の早い園地では、「落花50日後頃」の散布を追加することとし、マイコシールドを使用する。
- ④ マイコシールドとスターナ水和剤は薬剤耐性の懸念があるので、それぞれの薬剤を連続使用しない。

【カメムシ類】

- ① 8月上旬まで断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので卵塊は見つけ次第、つぶして処分する。ふ化幼虫がみられたら、分散する前に捕殺する。
- ② 成虫の飛来状況に応じて、「落花30日後頃」にスミチオン水和剤40、「落花40日後頃」にダントツ水溶剤を選択する。

○ 西洋なし

【輪紋病】

- ① 6～7月の幼果期は最も感染しやすいので、10日間隔の薬剤散布を守る。散布予定日に降雨が予想される場合には、事前散布する。
- ② 生育の早い園地では、「落花50日後頃」の散布を追加することとし、ベルコート水和剤を使用する。

【カメムシ類】

- ① 8月上旬まで断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので卵塊は見つけ次第、つぶして処分する。ふ化幼虫がみられたら、分散する前に捕殺する。
- ② 7月上旬までに発生がみられた場合は、MR. ジョーカー水和剤2,000倍を特別散布する。

参考表 特産果樹に使用する農薬の作用機構分類

<殺菌剤>

農薬名	有効成分	FRAC コード	系統名
ピクシオDF	フェンピラザミン	17	アミノピラゾリノン
ゲッター水和剤	ジエトフェンカルブ	10	N-フェニルカーバメート
	チオファネートメチル	1	ベンゾイミダゾール
フルーツセイバー	ペンチオピオラド	7	SDHI 剤
アリエッティC水和剤	キャプタン	M04	フタルイミド
	ホセチル	P07	エチルホスホナート
キノンドー水和剤40	有機銅	M01	有機銅剤
ランマンフロアブル	シアゾファミド	21	Q i I 剤
ライメイフロアブル	アミスルプロム	21	Q i I 剤
スイッチ顆粒水和剤	シプロジニル	9	アニリノピリミジン
	フルジオキソニル	12	フェニルピロール
ポリベリン水和剤	イミノクタジン酢酸塩	M07	ビスグアニジン
	ポリオキシシン複合体	19	抗生物質
オーソサイド水和剤80	キャプタン	M04	フタルイミド
パスワード顆粒水和剤	フェンヘキサミド	17	ヒドロキシアニリド
インダーフロアブル	フェンブコナゾール	3	DMI 剤
ルビゲン水和剤	フェナリモル	3	DMI 剤
マイコシールド	オキシテトラサイクリン	41	抗生物質
スターナ水和剤	オキシリニック酸	31	カルボン酸
ベルコート水和剤	イミノクタジンアルベシル酸塩	M07	ビスグアニジン

<殺虫剤>

農薬名	有効成分	IRAC コード	系統名
テルスターフロアブル	ビフェントリン	3A	ピレスロイド
スカウトフロアブル	トラロメトリン	3A	ピレスロイド
スミチオン水和剤40	MEP	1B	有機リン剤
ダントツ水溶剤	クロチアニジン	4A	ネオニコチノイド
MR. ジョーカー水和剤	シラフルオフエン	3A	ピレスロイド

FRAC農業用殺菌剤作用機構分類、IRAC農業用殺虫剤作用機構分類の最新版は農薬工業会ホームページ (<https://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html>) を参照。

(5) 野菜

○ ジャがいも

【疫病】

- ① 平均気温15℃以上で、降雨日が2～3日続くと感染し始め、20℃前後で曇天多湿な天候が続く場合に蔓延しやすい。
- ② 着蕾期～開花期頃から7～10日間隔での予防防除を徹底する。特に、濃霧や雨の日が続くような場合には、散布間隔が空かないように降雨の合間をぬって薬剤散布を行う。
- ③ 発生が認められた場合には、蔓延防止のため、5～7日間隔での薬剤散布を徹底する。

○ アブラナ科野菜

【コナガ・ヨトウガ】

- ① 生育初期に発生すると被害が大きいため、定植時の薬剤防除を徹底する。
- ② 老齢幼虫になると薬剤効果が劣るので、若齢幼虫のうちに防除する。
- ③ 殺虫剤に対する抵抗性が発現しやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。コナガでは、ジアミド剤 (I:28) の抵抗性個体群が県内で確認されているので注意する。
- ④ 同時期に発生加害するモンシロチョウ及びウワバ類などの幼虫防除も考慮して薬剤を選択する。

○ にんにく

【春腐病】

- ① 降雨や濃霧が続く場合に急増する特徴があり、有機物や肥料（追肥）が過剰に施用されたほ場で多発しやすい傾向がある。
- ② 発病株や腐敗株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取り処分する。多発状態となつてからの薬剤散布では防除効果が上がらないことから、薬剤散布は腐敗株を処分してから実施する。
- ③ 天気予報により3～4日降雨が続くと予想される場合には、降雨前に薬剤を予防散布する。また、降雨後にも再散布する。
- ④ 発生の見られたほ場では、抗生物質剤、オキシロニック酸剤及びそれら混合剤を中心に7日おきを目安に散布して蔓延防止を図る。

(参考) 抗生物質剤及びオキシロニック酸の混合剤

農薬名	有効成分	FRAC コード	系統名
バリダマイシン液剤5	バリダマイシン	U18	抗生物質
アグリマイシン-100	ストレプトマイシン硫酸塩	25	抗生物質
	オキシテトラサイクリン	41	抗生物質
カスミンボルドー	カスガマイシン-塩酸塩	24	抗生物質
	塩基性塩化銅	M01	無機銅
銅パーシン水和剤	カスガマイシン-塩酸塩	24	抗生物質
	塩基性塩化銅	M01	無機銅
ナレート水和剤	オキシロニック酸	31	カルボン酸
	有機銅	M01	有機銅
カセット水和剤	オキシロニック酸	31	カルボン酸
	カスガマイシン-塩酸塩	24	抗生物質

【さび病】

- ① 初発時期が早いほど多発する傾向がある。また、肥料切れなどで草勢が衰えた場合や、逆に窒素過剰の場合にも発生しやすくなる。
- ② ほ場をよく見回り、発生が認められた場合には、早めに薬剤散布する。また、散布にあたっては、下葉までまんべんなく薬液がかかるように留意する。
- ③ 蔓延期に薬剤散布する場合には、下表の各防除薬剤の効果の持続期間（散布間隔）を参考にして効率的に防除を実施する。なお、発生が多い場合は下表の効果持続期間より散布間隔を短くする。

《ニンニクさび病防除薬剤の散布間隔の目安》

薬剤名	有効成分	FRAC コード	系統名	さび病蔓延期における効果の持続期間		
				21日 程度	10～14日 程度	7～10日 程度
アミスター20フロアブル	アゾキシストロビン	11	QoI 剤	○		
アミスターオブティフロアブル	アゾキシストロビン	11	QoI 剤	○		
	TPN	M05	クロロニトリル剤			
シグナムWDG	ピラクロストロビン	11	QoI 剤	○		
	ボスカリド	7	SDHI 剤			
オンリーワンフロアブル	テブコナゾール	3	DMI 剤	○		
ラリー乳剤	マイクロブタニル	3	DMI 剤		○	
ストロビーフロアブル	クレソキシムメチル	11	QoI 剤		○ (10日程度)	
テーク水和剤	シメコナゾール	3	DMI 剤			○
	マンゼブ	M03	ジチオカーバメイト剤			

【葉枯病・黄斑病】

- ① 濃霧や雨の日が続くと発生しやすくなる。
- ② ほ場をよく見回り、感染の拡大がないよう初期防除に努め、発生初期から10日おき位に薬剤を散布する。

【 白斑葉枯病 】

- ① 本病は葉先枯れ症状が多く見られるほ場で発生しやすい。
- ② 病原菌は葉先枯れした部分から感染し、まとまった降雨があり、その後に好天が続くと発病し始めるので、初発確認に努め、薬剤散布は発生初期から行う。

【 ネギコガ 】

- ① 幼虫が食入してからの薬剤散布では、十分な殺虫効果が得られないので、成虫の発生盛期～幼虫のふ化時期に薬剤散布し、幼虫が食入する前に防除を行う。
- ② 第1世代成虫の発生盛期は6月上中旬頃と予想される。ほ場をよく観察して適期防除に努める。

★農薬を使用する際には必ず最新の農薬登録情報を確認してください★

農林水産省「農薬登録情報提供システム」 <https://pesticide.maff.go.jp/>
(独) 農林水産消費安全技術センター「農薬登録情報・速報」
<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/index/index.html>

～青森県農薬危害防止運動展開中！（6月1日～8月31日）～

- 農作物や使用者の安全のため、農薬は使用基準を守って使用しよう！
- 農薬散布の際は、周辺に農薬を飛散させないようにしよう！

☆農薬散布時は農薬の飛散防止対策をしてください☆

学校、保育所、病院、公園等の公共施設内の植物、街路樹並びに住宅地に近接する農地（市民農園や家庭菜園を含む）及び森林等において、農薬の飛散を原因とする住民や子ども等の健康被害が生じないように、飛散防止対策を徹底しましょう。農薬散布に当たっては、事前に周辺住民に対して、農薬使用の目的、散布日時、使用農薬の種類及び農薬使用者の連絡先等を幅広く周知するとともに、近辺に化学物質に敏感な人が居住していることを把握している場合には、十分配慮しましょう。

☆クロルピクリン剤の安全使用について☆

本県では、ながいもやごぼう等の根菜類の作付けが多く、土壌病害を防除するため、クロルピクリンが使用されていますが、その使用に当たっては次の事項を遵守しましょう。

<使用上の注意>

- 処理作業は、気温・地温の低い午前中か夕方に行う。
- 使用時は、防護マスクや防護メガネ等を着用する。
- 揮散したガスは低地にたまりやすいため、農地近郊の低位置に人家や畜舎等がある場合は使用しない。
- 降雨等により地下水や河川等に流入するおそれがある場合は使用しない。
- 人家や畜舎等に近接する農地での使用を避けるとともに、人家や畜舎等の近郊では、それらが風下になる場合は作業を一時中断する。
- 使用後は、直ちにポリエチレンフィルム等（厚さ0.03mm以上の厚めのもの、難透過性のもの）で被覆するなど、揮散防止のために必要な措置を講じる。
- 使用済みの空き缶等は、周囲に影響を及ぼさないよう適切に処分する。
- トラック等で薬剤を運搬する場合は、薬剤が脱落しないよう確実に固定して積載する。
- 施錠可能な冷暗所に保管する。

県民の皆さまへのお願い
新型コロナウイルス感染拡大防止



<https://www.pref.aomori.lg.jp/koho/covid19kakudaiboushi.html>

《当情報に関する問い合わせ先》

青森県病害虫防除所 TEL:017-729-1717 FAX:017-729-1900
〒030-0113 青森市第二問屋町4-11-6
E-mail: byogaichu@pref.aomori.lg.jp

※当情報は、青森県農業情報サービスネットワーク「アップル農場：病害虫防除情報」(<https://www.applenet.jp>)に掲載しています。